

Message



学長
—
中野 義昭

1000年先も変わることはない
普遍の価値を学ぶ。
自分を生かせる軸を獲得する。この大学で。

私が著した電磁波工学の教科書のまえがきに、「ここに載っていることは、すべて安心して学んで欲しい」とメッセージを記しています。その意味するところは、これから皆さんが学ぶことは、ある一時期にだけ通用するものでなく、10年20年どころか100年先、たとえ1000年経っても動きようのない法則だということです。時代は変わる。気候や政治情勢も変わる。それでも変わりようのない普遍的で、しかも全人類共通の英知を、工学という世界を通して皆さんは学ぶことができるのです。

そしてもう一つ。若いうちにはもちろん挫折もあります。しかしそれは、たまたまその評価軸上で強みを発揮できなかっただけのこと。別の軸上であれば、社会に大きく貢献できたかもしれません。大切なのは、自分を生かすべき軸を見分けることと、たとえ失敗しても立ち直るレジリエンス(回復力)を身につけること。豊田工業大学は、皆さんがそうした力をつけていくための場所でありたいと願っています。

- 学歴
 - 1982年3月 東京大学工学部電子工学科卒業
 - 1987年3月 東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(工学博士)

- 職歴
 - 1987年4月 東京大学工学部電子工学科 助手
 - 1988年4月 東京大学工学部電気工学科 専任講師
 - 1992年4月 東京大学工学部電子工学科 助教授
 - 2000年10月 東京大学大学院工学系研究科電子工学専攻 教授
 - 2001年1月 東京大学大学院工学系研究科電子工学専攻長/
電子工学専攻常務委員/電子工学科長
 - 2002年4月 東京大学先端科学技術研究センター 教授
 - 2010年4月 東京大学先端科学技術研究センター 所長
 - 2013年4月 東京大学大学院工学研究科電気系工学専攻 教授
 - 2024年4月 学校法人トヨタ学園豊田工業大学 客員教授
 - 2025年4月 学校法人トヨタ学園豊田工業大学 副学長・教授

- 受賞等
- 2007年6月 第5回産学官連携内閣総理大臣賞
 - 2022年6月 第83回電子情報通信学会功績賞
 - 2024年5月 エレクトロニクス実装学会賞
- IEEEライフフェロー、OPTICA (IBOSA) フェロー、電子情報通信学会名誉員/フェロー、応用物理学会フェロー

歴代学長

1981年1月～1984年8月 長尾 不二夫 (名誉学長:1984～1992年)	2004年9月～2010年8月 生嶋 明
1984年9月～1990年8月 駒井 又二	2010年9月～2019年8月 榊 裕之 (名誉学長:2021年6月～)
1990年9月～1996年8月 小林 清志	2019年9月～2025年8月 保立 和夫
1996年9月～2004年8月 永澤 満 (名誉学長:2004～2020年)	2025年9月～(現在に至る) 中野 義昭

TTI

Special Interview

学校法人トヨタ学園 豊田工業大学 中野義昭 新学長が語る — いま、工学を極めるということ。



Special Interview

学校法人トヨタ学園
豊田工業大学

TTI

いま、工学を極めるといふこと。



● 中野義昭 新学長が語る

豊田工業大学 第8代学長

中野 義昭

新学長就任 特別インタビュー

2025年9月、豊田工業大学第8代学長に中野義昭教授が就任しました。長年、研究者として先端科学技術分野の新領域を切り拓いてきた中野新学長が、工学を極める意義やビジョンについて語ります。

足跡のない方へ
ためらわず挑んでいく。
大学での学びが、
その先を照らす光となれるように。

あくなき探求心と
主体的な学びの先に、
待っているものがある。

分野横断型の学びこそ 研究の本質

本学は工学部だけの単科大学であり、初年次から専門分野を定めず、機械システム・電子情報・物質工学の3分野を広く学ぶ、分野横断型の履修体系を特色の一つとしています。一般的に学部、学科を縦割りで考えたりもしますが、とすれば、その縦割りの領域が自分たちの全世界になってしまいがちです。しかし、研究において、自身の専門領域だけで課題解決に取り組んでしまうと、壁にぶつかることが少なくありません。というのも、複雑な問題の多くは、単一の分野では解明できない複数の要因が絡み合っているからです。だからこそ、分野を横断して学ぶことが重要になります。そうすることで、自分の専門外にも世界が広がっていることを意識することができ、広い視野をもって研究に取り組むことができます。自分一人で解決できなければ、別の分野を専門とする人と協力すればよいのです。狭い領域で完結しない分野横断型履修は、視野や発想を拡げるという観点で大きな意味を持つと言えます。

加えて産業界では、一人で完遂できる仕事はありません。性別、年齢や国籍、地域など多様な属性の人びととつながり、協力して仕事を進め、成果を皆で社会へ還元する。技術者および研究者は孤独に思索を深める時間も重要ですが、活動を自由で開かれたものとする事で互いに刺激し合い、その結果仕事は急速に発展し、ひいては大きな成果が生まれるのです。

自由な心が個を輝かせ 真の国際産業リーダーをはぐくむ

開学以来、本学は工学の専門的能力に加え、豊かな人間力や国際性の涵養にも注力してきました。しかし「国際産業リーダーの育成」と「地球課題の解決」という本学の目指すところからすれば、まだ道半ば。枠に捉われず柔軟に発想し、想いを伝え、自ら動き、理解や共感を獲得しながらチームを率いていけるのは、単に語学力の有無でなく、伝えるべき中身や人間力が備わっているこそです。私たちは、黙っていること、おとなしくしていることをつい選びがちですが、世界では逆です。発信しないことは埋没することであり、リスクでしかありません。

だから本学は、学生の心をもっと自由にしたい。若者は本来、挑戦することに長けているはず。その能力を解放することで、より一層、個も輝きを放ってくれるのではないかと期待しています。

極めたいと願う誰にでも チャンスは訪れるから

私の父は航空機のエンジニアを志す青年でした。しかし終戦で航空学科が閉鎖されたため道を断たれ、模型飛行機づくりでその夢を追い続けました。ただの板切れと竹ひごが、そんな父の手で精巧な飛行機に生まれ変わっていく過程を眺めながら、私も工作が好きになり、モノづくりに懸ける情熱も学んでいった気がします。

中学生になるころ、ラジオやテレビはすっかり普及していましたが、なぜ空中を電波が飛び、人の声が聴けるのか？その仕組みが不思議でたまたま、電子部品を買い揃えてはラジオやアンプを自作するようになりました。

さて私の専門、光電子デバイス工学は、スマートフォンや光通信に不可欠なものとして現代社会を支えています。私が大学院で研究を始めた40年前は、電子工学の新しい分野として発展し始めた時期でした。

その道へ進めば大企業に就職できる、高報酬を得られるなどのモチベーションではなく、純粋に面白そう、やってみたいという思いに駆られて飛び込みました。

工学を学び、研究したいと思うテーマとの出会いは、好きなことを追いかけた先、主体的な学びの先に待っているものだと思います。つまりそれは誰かから与えられるものではなく、好きで極めたいと願うことで誰でも巡り会えるものということです。

本学は、そうした自由で、本当に面白いと思える学びを通して、「個を輝かせる」大学でありたいと思っています。

